ひとりぼっち化する男子

―― 2010 年 JYSG 全国 26 大学調査の結果から ――

辻　　泉

目　　次

1.「男子がヤバイ」?
2. 友人関係とジェンダー
3. 男子の友人関係に影響を及ぼす要因は何か
4. まとめ・今後への処方箋

1.「男子がヤバイ」?

・本論文の目的

本論文では，友人関係とジェンダーについて，とりわけそれが不得手といわれることの多い若年男性に注目し，調査データを元にして実態を明らかにするとともに，今後に向けての展望を考察していくことを目的としている。詳細は後述するが，ここでは青少年研究会（http://jysg.jp/，本論文では必要に応じて“JYSG”とも表記）が行ってきた，いくつかの調査の結果を紹介しながら，こうした点を検討していきたい。

近年，大学などでも，成績優秀者をランキングすると，上位を女子学生が占めるといったことがよくみられる。さらに就職活動においても，女子学生の方が成績だけでなくコミュニケーション能力も高いため，ますます上位を占めるようになってきているのだという。この点は以下のような週刊誌の記事にも表れていよう。

> 『就職試験上位は女子学生ばかり　男子に下駄履かせ内定与える』…（略）…
>
> 頭を抱える企業の人事担当者がいうように，さすがに女性だけを採用するわけにもいかず，選考結果に目をつぶって男子学生に“下駄をはかせている”のだという。
>
> …（略）…
>
> 『就活のコノヤロー』（光文社新書）の著者で，教育ジャーナリストの石渡嶺司氏も「男子の不甲斐なさに比べて，女子の優秀さは認めざるを得ない」と語る。
>
> 「就活セミナーでも，何をしゃべっているかわからずボソボソしゃべる男子学生に助け舟を出して，討論を盛り立てる女子学生という光景はよく目にします。男子は覇気がありませんねェ」
>
> ※週刊ポスト 2014 年 6 月 6 日号より抜粋（強調は筆者）
>
> http://www.news-postseven.com/archives/20140529_258065.html
>
> 2014.05.29 07:01 取得

・何が「ヤバイ」のか？

この記事は裏を返せば，若年男性にコミュニケーション能力が乏しいと思われているということだが，たしかに近年，若者たちの間でもそれを表す 2 つの言葉が存在している。それは，「ぼっち」と「コミュ障」である。

前者は，「ひとりぼっち」の略語で，友人が（ほぼ誰も）いない状態を示し，後者は「コミュニケーション障害」の略語で，コミュニケーショ

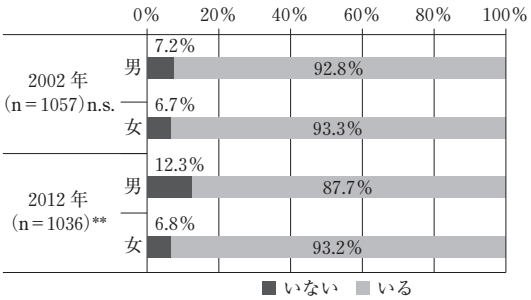
ン能力に乏しく，それが得意ではない状態にあることを示す言葉である。大学でも新学期初回の授業で，いかにも人づき合いの苦手そうな男子学生が，「自分，“コミュ障”で，あまり友だちづきあいとか得意じゃなくって，“ぼっち”でいることが多いんですけど，よろしくお願いします」などと自己紹介のときにしばしば用いているのを耳にする。

では，なぜ若年男性は「ぼっち」で「コミュ障」と言われるのだろうか。あるいは，そもそも，本当に若年男性は「ぼっち」で「コミュ障」なのだろうか，必ずしも，全員が全員そうだとも思い難いが，あるいは実際に女性と比べて，これらの点には違いがみられるのだろうか。こうした点について，感覚的な物言いに留まるのではなく，実証的な調査データに基づいて検討することが，重要だといえるだろう。

・増加する“ぼっち”の男子

ここで青少年研究会が，2002 年と 2012 年に，杉並区と神戸市の 16 ～ 29 歳の若者を対象に行った調査結果を比べてみたい（これらの調査の詳細は，藤村・浅野・羽渕編 2016 を参照のこと）。図 1 は，親友（恋人を除く）がいないかいるかという点と性別との関連を年度ごとに比べたものである。2002 年では，親友がいないものは全体でみても 6.9％と少数であり，女性 6.7％に対して男性 7.2％と統計的に有意な差もみられなかった[1)]。しかし 2012 年になると，親友がいないものは全体で 9.4％とやや微増し，女性が 6.8％とほぼ変わらないのに対し，男性は 12.3％と増加傾向にあり，統計的に有意な差もみられたのである。いわば，若い男性の 10 人に 1 人以上が親友がいないと答えていたということであり，たしかに“ぼっち”である傾向の高まりが伺えよう。

図 1　親友の有無と性別とのクロス表



またさらにこれを年齢層別にみていくと，20 代後半（25 ～ 29 歳）では，親友がいないと答えたものの割合は，2002 年 8.4％，2012 年 8.8％と変化していないのに対し，20 代前半（20 ～ 24 歳）では，同じく 6.6％から 10.1％へ，さらに 16 ～ 19 歳でも 5.4％から 9.2％へと増加し（いずれも 10％水準の有意性），若者の中でも特に下の年齢層において，男性たちの“ぼっち”化が少しずつではあれ，進んでいることが伺えよう。

よって本論文では，青少年研究会の有志が，2010 年に実施した全国の大学生を対象に実施した調査（2010 年 JYSG 全国 26 大学調査，以下省略して「2010 大学生調査」と表記）の結果[2)]を特に取り上げて議論を進めていくこととしたい。それは，この調査が特に若い年齢層である大学生に絞って行われた調査であり，大都市に限らず地方都市も含めた，全国の多様な大学を調査対象とするとともに，友人関係や「男らしさ」について，かなり掘り下げた質問を行った調査だからである。

以降では，まず若者の友人関係とジェンダーについて，とりわけ男性に注目してその実態を明らかにしつつ（2 節），そうした実態が一体何に規定されているのか，「男らしさ」に関する項目の回答結果などから明らかにし（3 節），その上で今後の展望を考察していくこととしたい（4 節）。

2．友人関係とジェンダー

・「広く浅い男子，狭く深い女子」?

これまで，発達心理学（伊藤編 2000 など）や『友情の社会学』（Allan1989＝1993）などでは，

若年男性は「広く浅い」道具的な，若年女性は「狭く深い」情緒的な，友人関係を築く傾向にあるといわれてきたが，それは，いわゆる「男性が外で働き，女性は家庭を守る」というような，それぞれのライフコースの予期的社会化によるものだと考えられてきた。

しかしながら，こうした友人関係をめぐるジェンダーディバイドは，社会の流動化とともに大きく揺らぎつつあるといわれる（Chambers, 2006 = 2015）。この点については，特に次のような2つの流動化過程が重要であろう。

1つには，ジェンダーやライフコースの流動化があり，今日では「男が外で働き，女が家を守る」というような性別役割分業はもはや大きく揺らいでいる。そして，もう1つには，インターネットや各種のモバイル機器といった新しいメディアの普及に伴う，人間関係の流動化があり，これらは互いに関連を持つこともありえよう。

こうした社会変化の中で，各種の調査から明らかになってきたのは，特に後者の人間関係の流動化に適応したのは，どちらかといえば女性だったのではないかということだった。いわば各種の新たなメディアの利用においても，またそれらを通した人間関係の形成においても，男性と比べて女性の方が総じてアクティブである傾向が，各種の調査からはみて取れるのである。

先の対比でいえば，人間関係の流動化とともに，若年女性を中心として「広く深い」関係が形成される可能性が指摘されてきたわけであり，浅野（1999）や辻大介（1999），松田（2000）などが提起した「選択的関係」論は，まさにその典型といえるだろう。たしかに，少し前でいえば「メル友」や「プロフィールサイト」であったり，今日でいえば「LINE」や「SNS」を介したコミュニケーションとして中心的に想定されているのは女性たちの実態である。

・「2010大学生調査」の結果から①～友人関係についての「意識」

そうであるならば，むしろこうした変化の中，それに取り残されてきた若年男性は一体どうしているのだろうか。また，なぜ，若年男性はそのような状態にあるのだろうか。

ここでは「2010大学生調査」の結果から，特に女性との対比において，若年男性の友人関係の特徴をあぶりだしていくことにするが，まずは友人関係といっても，いくつかのとらえ方があることを整理しておきたい。

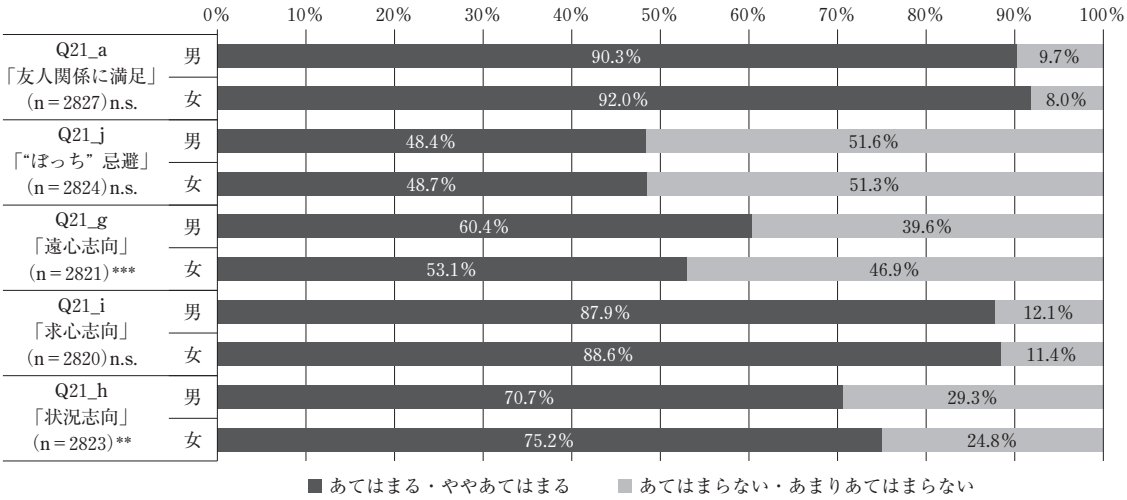
第1に，友人関係に関する「意識・考え方」というとらえ方がある。

例えば，友人関係の満足度（Q21a. 現在の友人関係に満足している）であったり，ここでいう「ぼっち」を忌避する志向（Q21j. まわりから友だちの少ない人間だと思われるのはいやだ）などが考えられるが，図2をみると，全体的には多くの若者が友人関係に満足する一方で（肯定的な回答の割合が男性90.3％，女性92.0％，以下同様），半数ほどが「ぼっち」を恐れており（男性48.4％，女性48.7％），これらについては男女の間で有意な差がみられないことがわかる。

他に友人関係に関する意識としては，浅野（1999）が整理した3つの志向性（「遠心志向（＝広く浅く）」「求心志向（＝狭く深く）」「状況志向（＝広く深く）」があり，このうちの「状況志向」が，いわゆる「選択的関係」として1990年代以降注目されてきたものである。

それぞれにあてはまる項目の結果をみていくと，たしかに「遠心志向（Q21g. 友だちの数は多いほうがよい）」についての肯定的回答の割合は，男性が60.4％と女性の53.1％を有意に上回っている一方で，「求心志向（Q21i. 大人数でいるよりごく親しい数人の友だちといるほうがいい）」については男女差がみられないのがわかる。そして，新しい友人関係のありようといわれる「状況志向（Q21h. 遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている）」については，男性70.7％に

図２　友人関係に関する「意識」と性別とのクロス表



対して女性の方が 75.2％と高くなっているのがわかる。

いわば，意識の面では，男性の方が依然として「遠心志向（＝広く浅く）」を強く持っているのに対して，女性は「状況志向（＝広く深く）」という新たな意識を持っているということがいえそうだが，でははたして，実際の友人関係にはどのような違いがみられるのだろうか。

・「2010 大学生調査」の結果から ②～友人関係についての「行動・実態」

そして第 2 のとらえ方として，友人関係についての実際の「行動や実態」に注目するという方法がある。具体的には，友人の人数やそれらの友人とともにする行動，あるいは，俗にいう「コミュ力（コミュニケーション能力）」にあたる「ソーシャルスキル」などであり，友人の人数については，漠然と尋ねるのではなく，親しさの度合いに従って，「親友」「仲の良い友だち」「知り合い程度の友だち」と 3 段階に分けて尋ねた。また「2010 大学生調査」では，さらに，特に親しくしている相手 3 人までについては，共にする行動内容やコミュニケーションの実態について，詳細に掘り下げている。

まず図 3 から，友人数を親しさ別にみると，親友（平均人数で男性 4.92 人＞女性 4.15 人，以下同様）や仲の良い友だち（男性 18.53 人＞女性 17.07 人）といった，親しさの度合いの高い友人については，男性の方が人数が多いことがわかる。一見，さきほどの「遠心志向」は男性が強いという結果とも一致しているようであり，逆にこのような中で，親友が 1 人もいないような「ぼっち」の男性は，心理的により深刻な立場に置かれるようなことも想像できる。また，親友がいないものの割合は，やはりこの調査においても，男性が 8.2％と女性 4.7％よりも有意に上回っていた（0.1％水準の有意性）。

一方で，親しさの度合いが低いほど人数は増える傾向にあるので，友人数全体でみると，男女の違いはあまり大きくはないともいえ，実際に知り合い程度の友だちについては，男性 51.05 人に対し女性 50.87 人と有意な差はみられなかった。

次に，特に親しい 3 人の相手に絞って，どのような友人がいるかという属性面などについて，詳細にみていこう。図 4 は，これに関するいくつかの項目について，割合で示したものだが，知り合

図 3　親しさ別の友人数（単位：人）

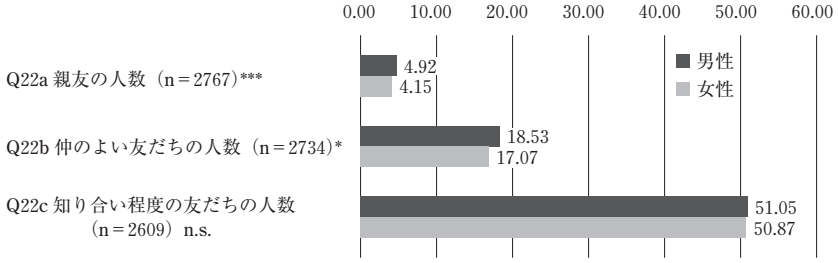
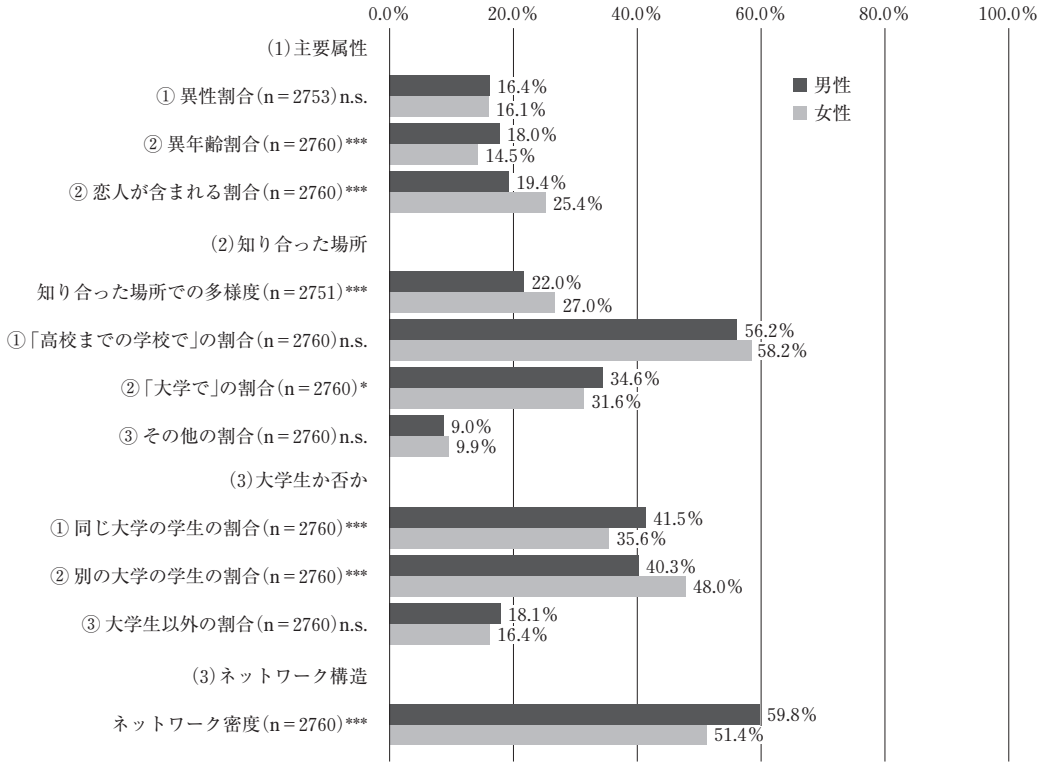


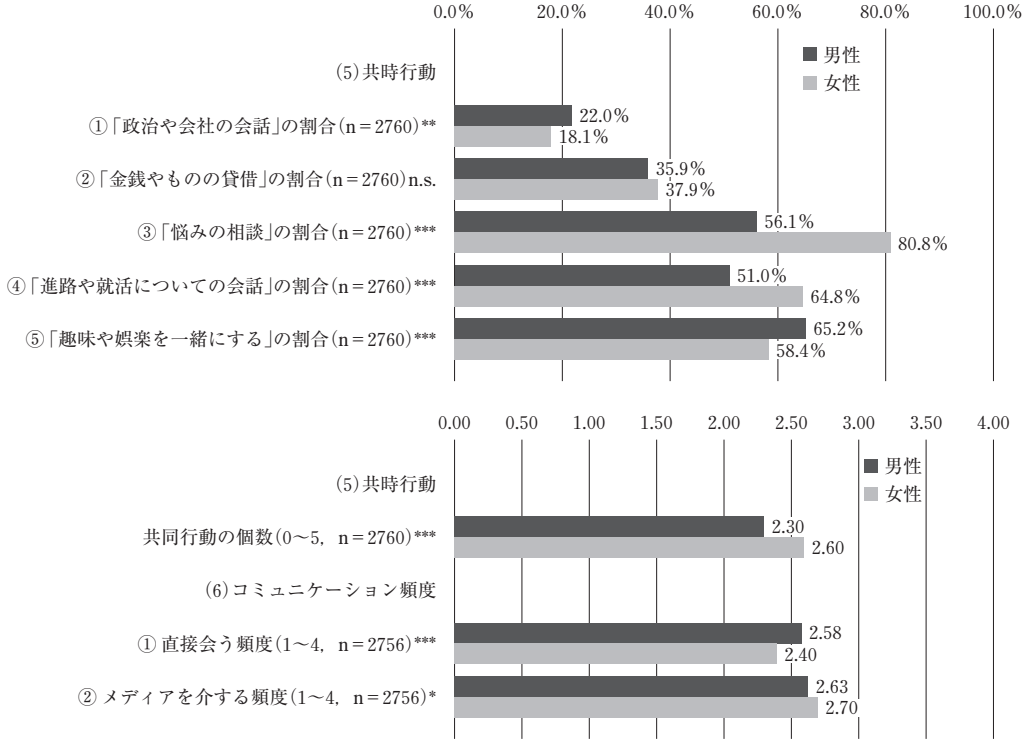
図 4　親しい友人との「行動や実態」（属性など）



った場所の多様度であったり（男性 22.0％＜女性 27.0％），恋人が含まれる割合（男性 19.4％＜女性 25.4％）や別の大学の学生が含まれる割合（男性 40.3％＜女性 48.0％）は女性の方が高い。一方で男性は，異年齢の友人が含まれる割合こそ高いが（男性 18.0％＞女性 14.5％），むしろ同じ大学の学生が含まれる割合が高かったり（男性 41.5％＞女性 35.6％），これら 3 人の「密度（お互いに知り合いである割合）」も濃かったりする（男性 59.8％＞女性 51.4％）。よって，この点では男性の友人関係の方が閉鎖的で，むしろ女性の方が開放的であるということができるだろう。

同様に，特に親しい 3 人の相手とどのような行動をするかという点についてみていくと，図 5 に

図５　親しい友人との「共時行動・コミュニケーション頻度」



あるように，男性が女性を上回っていたのは，「政治や社会の会話」「趣味や娯楽を一緒にする」といった項目や（前者が男性 22.0％＞女性 18.1％，後者が男性 65.2％＞女性 58.4％），「直接会う頻度」（男性 2.58 ＞女性 2.40）などであり，逆に女性が男性を上回っていたのは，「悩みの相談」「進路や就活についての会話」といった共時行動（前者が男性 56.1％＜女性 80.8％，後者が男性 51.0％＜女性64.8％）や，「メディアを介する頻度」（男性 2.63 ＜女性 2.70）といった項目であった。さらに，共時行動の種類の多さ（あてはまる個数）についても，女性の方が平均で 2.60 個と，男性を上回っていた。

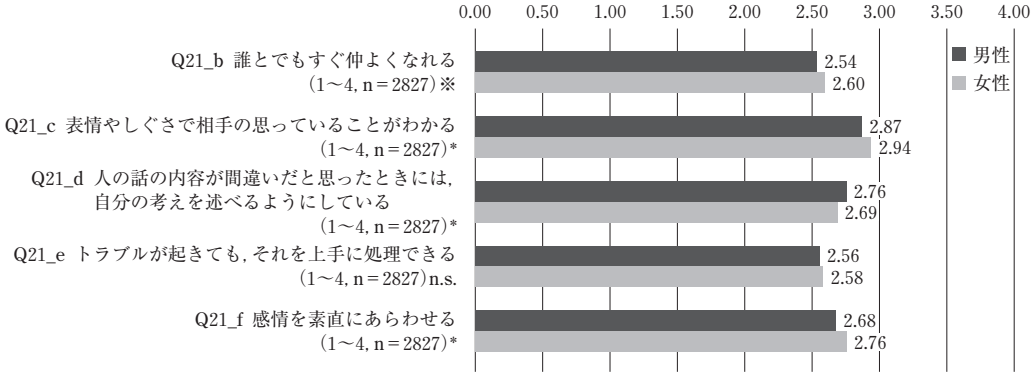
この点からすると，男性の方が直接会う頻度が高く，社会現象に関する会話をするなど，あたかも，まじめで古風であるような友人関係の様子が伺われる一方で，むしろ女性の方が，メディアを介する頻度も高く，悩みごとの相談なども含めて，同じ相手と多様な種類のコミュニケーションを行っていることがわかり，「多重送信」型であるといえる。

ここまでの結果をみると，メディアの普及もあって社会の流動化の激しい現在の状況に適応した友人関係を形成しているのは，男性よりも女性だといえるのではないだろうか。

・「2010 大学生調査」の結果から ③～ソーシャルスキルとジェンダー

そしてそれゆえに，図 6 にみられるようなソーシャルスキル[3)]の実態においても，そうした対比が表れているように思われる。ここでは，それぞれの項目に対して，１～４点の得点を与えている

図 6　ソーシャルスキル



が，「Q21_d 人の話の内容が間違いだと思ったときには，自分の考えを述べるようにしている」といった自分を貫くような内容では男性の方が上回っているものの（男性 2.76 ＞女性 2.69），「Q21_b 誰とでもすぐ仲よくなれる」「Q21_c 表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」「Q21_f 感情を素直にあらわせる」といった相手や状況にうまく合わせるような内容については，いずれも男性は女性よりも低くなっている（それぞれ，男性 2.54 ＜女性 2.60，男性 2.87 ＜女性 2.94，男性 2.68 ＜女性 2.76）。

さらに，ここで挙げられたソーシャルスキルに関する 5 項目を合計し，5 ～ 20 点の得点からなるソーシャルスキル尺度を構成してみると[4]，男性は 13.41 と女性 13.58 と比べて，やはり低くなっていることが分かる（10％水準の有意性）。

よって総じていうならば，男性の全てがそうだとまではいわないにしても，冒頭で触れた表現を繰り返せば，「ぼっち」で「コミュ障」である割合は，女性よりも男性の方が高いといえそうである[5]。

3．男子の友人関係に影響を及ぼす要因は何か

・基本属性による違い

では次に，なぜ若年男性の方が，女性と比べて「ぼっち」で「コミュ障」となりうるのか。その要因について考えてみよう。

まず 1 つには，基本的な社会属性の違いが想定される。具体的には年齢，実家の暮らし向き，大学の難易度，所在地などである。年齢が上がるほどに出会いの機会が増えて友人関係は広まるかもしれないし，比較的裕福な層で，大都市にある難関校に進んだ学生の方が多様な出会いの機会に恵まれるといったことは想定できるかもしれない。

ただ，「2010 大学生調査」において，これらの基本的な社会属性について男女で比較したところ，難易度では差がなく，年齢においてはむしろ女性の方が 10 代が多かった（18 ～ 19 歳の割合が男性 42.5％＜女性 53.4％，0.1％の有意性）。ただし，女性の方が暮らし向きに恵まれていたり（「余裕がある」「やや余裕がある」と答えたものの合計が，男性 37.7％＜女性 40.0％，1 ％の有意性），都市部の大学に通っているものの割合が高く（男性 69.5％＜女性 77.6％，0.1％の有意性），これらの点は多少考慮すべきかもしれない。

・社会学的な要因を探る ① メディア利用

一方で，ここではそれ以外の社会学的な要因も探ってみたい。その 1 つがメディアの利用実態であり，もう 1 つが「男性性（男らしさ）」に関するジェンダー意識である。

前者については，先にも触れたように，特にSNSなどインターネット上の各種サービスや，スマートフォンや携帯電話といったパーソナルメディアの普及は，若者たちの友人関係のありようを大きく変えてきたといってよい。中でも，若者がよく利用するものとして，この調査でもSNSの利用頻度（パソコン経由，スマートフォンや携帯電話経由を問わない）を尋ねており，その結果が図7だが，「ほぼ毎日」と答えたものは，男性が51.4％にとどまるのに対して女性が64.9％と上回り，逆に「まったくしない」と答えたものは男性が29.4％とほぼ3割に達し，女性の20.1％を上回る結果となっている。こうした違いが，どのような影響を及ぼしうるのか，検討する必要があるだろう。

・社会学的な要因を探る②「男性性（男らしさ）」に関するジェンダー意識

次に「男性性（男らしさ）」に関するジェンダー意識だが，「2010大学生調査」では，「Q43　あなたは，「男らしさ」という言葉を聞いたときに，男性のどんなイメージを思い浮かべますか。」という質問項目（4件法）を設け関連する12個の項目を詳細に尋ねている。

これらは，いくつかの先行研究を踏まえながら設けられた項目であり，例えば伊藤公雄は「男性性」を3つの志向性（「優越志向」「所有志向」「権力志向」（伊藤1996：104））にまとめていた。また，宮台真司や筆者らは，特に日本社会において，超越性志向および自己や身体への関心の強さが特徴的であると同時に，関係性への関心は弱かったということ，さらにロマン主義的で強い両義性を帯びてきたことなどを指摘してきた（宮台・辻泉・岡井編2009）。

これらの議論を踏まえて，「2010大学生調査」で設けられた「男性性」に関する12の項目は，次の表1のように，2つの軸からなるものとして整理することができる。

第1には「外見的要素」「内面的要素」「関係的要素」という軸であり，社会構造や社会関係を想定した場合に，主としてどの局面に関わる「男性性」なのかという視点から整理したものである（身体的・外見的な局面なのか，自己の内面的な局面なのか，それとも他者との関係性の局面なのか，という分類軸）。第2の軸は，ロマン主義的な強い両義性に関わるもので，「男性性」が，情熱的でありながらも冷静さも求められるようなことを想定して整理したものである。表1はこの2つの軸を掛け合わせて，12の項目をプロットしてある。

続いて表2は，これらの項目に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた割合の合計を示し，数値の大きいものから順に並べ替えた上で，男女間で有意差がみられた項目には不等号を付したものである。いくつかの項目で男女差がみられ興味深いが，特にここで指摘しておきたいのは，おお

図7　SNS利用と性別とのクロス表（n＝2811）***

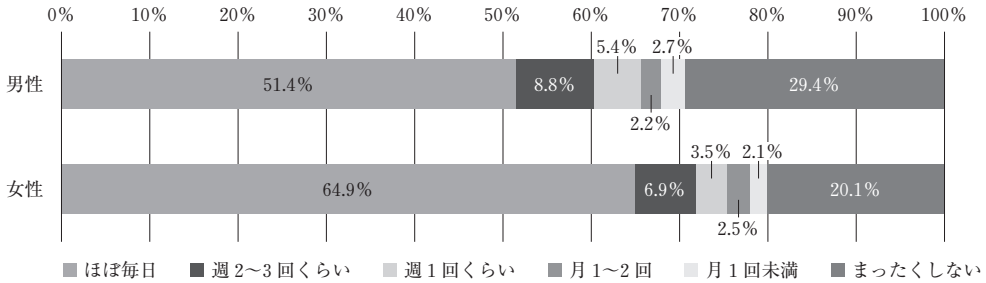


表１　「男性性」の構造と質問項目

	「情熱」要素	「冷静」要素
外見的要素	a. 筋肉質	g. 経済力（男＜女）
	b. 背が高い（男＜女）	
内面的要素	c. リーダーシップ（男＞女）	d. がまん強さ（男＞女）
	e. 闘争心（男＞女）	h. 頭がいい（男＜女）
	j. 世界観がある	
	l. 夢や希望がある	
関係的要素	f. 性的関心が強い	i. 女性にやさしい
		k. コミュニケーション能力（男＜女）

表２　「男性性」に関わるジェンダー意識と性別のクロス表

	N	全体	男性		女性
Q43l（男らしさ）大きな夢や希望を持っている n.s.	2819	81.8%	81.9%		81.9%
Q43a（男らしさ）筋肉質である n.s.	2819	81.7%	80.5%		82.4%
Q43c（男らしさ）リーダーシップがある**	2817	81.3%	**84.2%**	＞	79.6%
Q43j（男らしさ）その人なりのゆずれない考え方や世界観がある n.s.	2817	79.1%	80.3%		78.4%
Q43e（男らしさ）闘争心がある***	2816	77.0%	**80.9%**	＞	74.8%
Q43i（男らしさ）女性にやさしい n.s.	2817	75.8%	75.5%		76.0%
Q43b（男らしさ）背が高い***	2818	74.8%	67.3%	＜	**79.1%**
Q43d（男らしさ）がまん強い*	2819	70.3%	**73.0%**	＞	68.7%
Q43k（男らしさ）場の雰囲気を盛り上げるコミュニケーション能力がある*	2815	64.0%	61.5%	＜	**65.5%**
Q43g（男らしさ）経済力がある***	2816	61.8%	54.6%	＜	**65.9%**
Q43f（男らしさ）性的な関心が強い n.s.	2817	50.0%	50.0%		50.0%
Q43h（男らしさ）頭がいい※	2817	49.2%	46.8%	＜	**50.5%**

むね「内面的要素」では男性の方が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた割合が高く，逆に「外見的要素」や「関係的要素」では男性の方が低くなっているということだろう（表１でも，男女間で有意差の見られた項目にその旨を付記してある）。

具体的にいえば，「内面的要素」においては，「リーダーシップがある」（男性 84.2％＞女性 79.6％），「闘争心がある」（男性 80.9％＞女性 74.8％），「がまん強い」（男性 73.0％＞女性 68.7％）といった，いうなれば古き良き「男性性」を象徴するような項目で，男性の肯定的回答の割合が高くなっている一方で，「外見的要素」におけるいわゆる「三高」にあてはまるような「背が高い」（男性 67.3％＜女性 79.1％），「経済力がある」（男性 54.6％＜女性 65.9％）といった項目では，男性の割合が低く，さらに興味深いのは，新しい「男性性」ともいえる「関係的要素」にあてはまる，「場の雰囲気を盛り上げるコミュニケーション能力がある」では，男性は 61.5％と，女性の 65.5％よりも有意に低くなっているということだろう。

ここで特に気になるのは，「関係的要素」における男性の割合の低さであり，こうした「男性性」に関するジェンダー意識のありようが，友人関係の実態とどのように関わっているのか，先に述べた基本的な属性やメディア利用の実態とともに，併せて検討する必要があるといえるだろう。

さて，そうした本題の分析に進む前に，若者た

表3　「男性性」に関わるジェンダー意識の因子分析

回転後の因子行列（男性のみ）[a]

	因　子		
	1.「内面的男性性」因子	2.「経済・コミュニケーション力的男性性」因子	3.「外見・肉体的男性性」因子
Q43a（男らしさ）筋肉質である	.194	.024	**.750**
Q43b（男らしさ）背が高い	.091	.260	**.579**
Q43c（男らしさ）リーダーシップがある	**.558**	.189	.303
Q43d（男らしさ）がまん強い	**.530**	.127	.219
Q43e（男らしさ）闘争心がある	**.546**	.051	.366
Q43f（男らしさ）性的な関心が強い	.126	.271	**.415**
Q43g（男らしさ）経済力がある	.092	**.768**	.287
Q43h（男らしさ）頭がいい	.199	**.743**	.134
Q43i（男らしさ）女性にやさしい	.338	**.412**	.083
Q43j（男らしさ）その人なりのゆずれない考え方や世界観がある	**.613**	.171	−.029
Q43k（男らしさ）場の雰囲気を盛り上げるコミュニケーション能力がある	.418	**.505**	.117
Q43l（男らしさ）大きな夢や希望を持っている	**.623**	.200	.092

注）因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法
a．6回の反復で回転が収束しました。

ちがこうした「男性性」に関するジェンダー意識をどのようにとらえているかという視点が重要である。表3は，ここで取り上げた「男性性」に関する12項目について，そこに潜む共通の因子を探り出すべく，対象を男性に限定した上で因子分析を行った結果である。

その結果，3つの因子が抽出されたが，それらは，おおむね先の表1でも想定していた1つ目の軸での分類と重なっているといえるだろう。すなわち第一の因子は，先の「内面的要素」の項目が集まったものとして，「1．内面的男性性」因子と名付けられよう。一方で興味深いのは，「関係的要素」にあたる「女性にやさしい」や「コミュニケーション能力がある」などが，「経済力がある」「頭がいい」などと同じ因子を構成していることであり，これは「2．経済・コミュニケーション力的男性性」因子と名付けられよう[6)]。また，「性的な関心が強い」は先の「外見的要素」の項目と同じ因子を構成しており，これらは「3．外見・肉体的男性性」因子と名付けられよう。

以降の分析では，男性性に関するジェンダー意識については，この因子分析の結果に注目しながら議論を進めていくこととしたい。

・親友の有無の規定要因は何か

では本題の分析だが，まずどのような男性が「ぼっち」となりやすいのか，この点を明らかにするために，分析対象を男性に限定して，ロジスティック回帰分析を行う。すなわち，従属変数に親友の有無を設定した上で，独立変数として，先に見たような基本属性に関わる項目（年齢，実家の暮らし向き，偏差値，大学所在地）に加え，社会学的な要因といえるメディアの利用状況（この場合，SNSの利用頻度，6段階）と男性性に関する意識（「1．内面的男性性」「2．経済・コミュニケーション力的男性性」「3．外見・肉体的男性性」のそれぞれの因子得点），さらに先にみたソーシャルスキル尺度の値を投入し，どの要因

が強く働いているのかを比較分析することとする。

表4はその結果を表したものだが，これらの想定される諸要因を投入してみると，基本属性とも，またメディア利用や男性性に関する意識とも有意な関連はみられず，ソーシャルスキル尺度だけが，正の関連があることがわかる。

つまり男子大学生にとっては，（当然逆向きの因果関係も想定されるが）ソーシャルスキルの高低が，親友の有無，いわば“ぼっち”であるか否かを大きく規定しているといえよう。繰り返せば，もともとソーシャルスキル自体，女性と比べて男性の方が低い傾向がみられたが，男性の中でもさらにそれが低い人々は，友人関係に困難を抱えることが想定されるのである。

・ソーシャルスキルの規定要因は何か

では次に，そうしたソーシャルスキル自体は，何によって規定されるのだろうか。同様に，分析対象を男性に限定した重回帰分析を行う。ここでは，先に見たソーシャルスキル尺度の値を従属変数とし，独立変数に，基本属性に加えて，メディア利用（SNS利用の頻度）や男性性に関する3種類の意識（因子）を投入する。

表5がその結果だが，ソーシャルスキルについてはいくつかの要因が，影響を持っていることが伺える。まず基本属性の中でも，暮らし向きと入試偏差値との関連がみられた。いわば，暮らし向きに恵まれた男子大学生の方がソーシャルスキルが高い一方で，入試偏差値の高い男子大学生の方がソーシャルスキルが低いということである。一般的にもイメージされるように，受験勉強や学問に打ち込み過ぎると，ソーシャルスキルが十分に発達しづらいのかもしれない。

そして興味深いのは，こうした基本属性よりも社会学的な要因の方が強い関連を持っていることである。まずSNSの利用頻度と正の関連が見られるが，もはや若者にとって，友人関係の形成や維持のための必須のツールを使いこなせないことは，ソーシャルスキルを発達させる上で，大きなダメージとなってしまうのだろう。

さらに興味深いのは，男性性に関する意識とも正の関連がみられ，特に「内面的男性性」因子はもっとも関連が強く，さらに「経済・コミュニケーション力的男性性」因子も関連がある一方で，「外見・肉体的男性性」因子だけは有意な関連が

表4　親友の有無に関するロジスティック回帰分析の結果（男性限定）

	親友の有無	
	Exp (B)	
F1-2　年齢	0.994	n.s.
F12　現在の暮らし向き	1.035	n.s.
入試偏差値	0.976	n.s.
大学所在地ダミー（都市部＝1）	1.037	n.s.
Q21-b～f　ソーシャルスキル尺度	1.356	***
Q15d　SNSアクセス頻度（1～6）	1.034	n.s.
「内面的男性性」因子得点	1.203	n.s.
「経済･コミュニケーション力的男性性」因子得点	0.879	n.s.
「外見・肉体的男性性」因子得点	0.936	n.s.
モデル$\chi 2$乗	53.775	***
Nagelkerke R2乗	0.124	
N	986	

表5　ソーシャルスキル尺度に関する重回帰分析の結果（男性限定）

a. 従属変数Q21_b～fソーシャル・スキル尺度（5～25）	標準化係数β	
F1-2　年齢	0.019	
F12　現在の暮らし向き	0.083	***
入試偏差値	−0.091	*
大学所在地ダミー（都市部＝1）	−0.011	
Q15d　SNSアクセス頻度（1～6）	0.127	***
「内面的男性性」因子得点	0.131	***
「経済･コミュニケーション力的男性性」因子得点	0.076	*
「外見・肉体的男性性」因子得点	−0.021	
調整済みR2乗	0.050	***
N	1006	

みられなかった。

いうなれば，「男性性」の古き良き部分と新しい部分を両方兼ね備えていることがソーシャルスキルの発達に役立つということではないだろうか。すなわち「内面的男性性」因子にあてはまるのは，「ゆずれない考え方や世界観がある」「大きな夢や希望を持っている」といった項目であり，「経済・コミュニケーション力的男性性」因子にあてはまるのは，「経済力がある」以外に「コミュニケーション能力がある」「女性にやさしい」といった項目であった。すなわち，内側に熱い思いを秘めながらも，同時に周りとも円滑にコミュニケーションをしていくような，つまり「内面的な情熱」と「関係的な冷静」さの要素に関わる「男性性」を両面的に兼ね備えているほど，コミュニケーションスキルが高くなるということであろう。

そして「外見・肉体的男性性」因子については，コミュニケーションスキルと負の関連があるとまではいえないものの，有意な関連はみられなかった。よって，ともすると「筋肉質」「背が高い」といった点は，外見ばかりを気にする男性が注力しがちな事柄ではあるが，そればかりを気にしていても，決してコミュニケーション能力が高まりはしない，ということを意味しているのであろう。

4．まとめ・今後への処方箋

・どのような処方箋がありうるか

ここまでの分析を振り返ってまとめよう。

親友の有無に関するロジスティック回帰分析からは，基本属性とも，本章が注目した2つの社会学的な要因とも関連がみられず，唯一，ソーシャルスキルが大きく影響していた。若い男性にとって，「ぼっち」とならないためには，ソーシャルスキルを磨くことが重要だといえるだろう。

次に，ソーシャルスキルに関する重回帰分析からは，いくつかの要因が明らかになった。すなわち，暮らし向きや大学の入試偏差値なども関連がみられたが，それ以上に，メディアの利用状況（SNSの利用頻度）や男性性意識との関連が強くみられた。

今後に向けて，有効な処方箋を考えるならば，むしろこれらの社会学的な要因についての働きかけを行うことではないだろうか。

たとえばSNSの利用であれば，その普及を企業任せに野放しにするのではなく，よりわかりやすい利用方法を提示したり，困難やトラブルに対して公的機関などが対応を行ったり，といったことが考えられよう。

そして男性性に関するジェンダー意識についていえば，男性の側にもある程度の意識変革が求められているのではないだろうか。すなわち，人目を気にして，背の高さや筋肉質であることばかりに傾注する若い男性はよく目にするところだが，そうした「外見・肉体的男性性」はソーシャルスキルの高低とは関連がみられなかった。外見ばかり気にしていては，人との関わりが育たないということなのだろう。

その上で，古き良き部分と新しい部分とを両方兼ね備えた「男性性」意識を持っていくこと，いわば「内面的な情熱」と「関係的な冷静さ」とを兼ね備えていることが，若年男性がソーシャルスキルを発達させていく上では重要だということが明らかになった。おそらく，この2つはどちらかが欠けてはならないものなのだろう。

・今後の展望

実は，若年男性を社会的弱者とみなして，その支援を探るような動きは，ヨーロッパなどではすでに進んで行われている。日本でもようやく多賀（2016）などがこの点を論じ始めているが，池谷（2009）が論じるように，特にドイツ，あるいはイギリスなどでも，「男子援助活動」と呼ばれ，新たな社会変動の中で，むしろある局面において，社会的弱者に追い込まれていく，若年男性に

対する支援を訴える動きは，徐々にではあるが，たしかに広まりつつある。

冒頭でも述べたように，ライフコースやジェンダー，さらに人間関係の流動化は，今後ますます広まっていくことが予想され，であるならば，本論文で論じてきたような若年男性たちの苦境は，ますます強化されることが予想される。

近年，さらに興味深いのは，若年を超えて，成人したのちの男性における孤立状況が問題視されていることである。中高年の自殺や老人の孤独死などでも男性の割合が高いことは，よく指摘されることだが，この点について，石田は著作の『孤立の社会学』（2011）において興味深い議論を展開している。

すなわち，成人期以降の関係形成においては，これまで男性は会社などを通した公的関係を基盤とし，一方で女性は婚姻などを通した私的関係を基盤とするがゆえに，男性の方が広い関係を持ちやすいのだといわれてきた。だが近年，社会の流動化の進展とともに，公的関係を基盤とした男性の関係形成が大きく揺らぎ始め，むしろ男性こそが「関係弱者」として注目されつつあるのだという（石田 2011）。

成人期以降においても，男性が「ぼっち」となりうる社会ということだが，現在，新たなメディア環境に適応できず，また男性性に関するジェンダー意識を切り替えることができず，関係性に困難を抱えた若年男性が，そのまま年齢を重ねたとしたら，さらに問題が深刻化することは間違いないだろう。

よって，友人関係とジェンダー，特に男性におけるその関連は，まさに現在，そしてこれからも，注目すべき社会問題なのである[7)]。

1）なお，本論文において，統計的検定を行った際の図表中の有意水準の表記方法は以下のとおりとする。また，統計的検定にあたっては，無回答や極端に大きい値は除いたりするなどの工夫をした。

***＝0.1％水準で有意（$\alpha < .001$）
**＝1％水準で有意（$\alpha < .010$）
*＝5％水準で有意（$\alpha < .050$）
※＝10％水準で有意（$\alpha < .100$）

2）その詳細は以下のとおりである（羽渕 2011，辻泉 2017 などを参照）。

・調査時期：2010 年 9 月下旬～ 10 月
・調査対象者：社会学系授業を受講する大学生
・調査対象とした大学：国公立 6 校，私立 20 校（うち女子大 2 校）計 26 校（首都圏 14 校，関西圏 4 校，それ以外の地域 8 校）
・入学偏差値の分布（大学受験予備校データより）：43 ～ 66，平均 53.9
・調査方法：集合調査
・サンプル数：2831 人（1 校あたり：22 ～ 312 人）
・男女比：男＝36.5％，女＝63.5％
・年齢構成：18 歳＝14.5％，19 歳＝34.9％，20 歳＝31.8％，21 歳＝12.9％，22 歳＝4.9％，23 歳＝0.8％，24 歳以上＝0.2％
・調査対象とした大学の所在地（回答者ベースでの割合）：首都圏＝50.7％，関西圏＝21.5％，それ以外の地域＝27.8％
・大学種別：国公立＝12.6％，私立＝73.0％，私立女子＝14.4％
・部活動・サークル経験率：83.9％
・第一志望の大学入学率：46.3％
・大学満足度への肯定的回答（「よかった＋まあよかった」の合計）：55.4％
・おこづかい：平均 38000 円
・アルバイト経験：「現在している」69.3％，「したことがある」20.8％
・暮らし向き：「余裕＋やや余裕」39.0％，ふつう 38.6％，「やや苦しい＋苦しい」22.3％

3）ソーシャルスキルに関する項目については，相川・藤田（2005）における「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」を参照し，同尺度を構成する 5 つの因子にそれぞれあてはまる項目の中で，適宜因子負荷量の大きい項目を列挙して用いた。因子の種類としては，それぞれ ①「関係開始」②「解読」③「主張性」④「関係維持」⑤「記号化」である。

4）因子分析を行うと，これらの 5 つの項目は 1 つの因子を構成することになり，平均値は 13.52 で，クロンバック α も 0.644 となるため，一定の信頼性を持った尺度ということができるだろう。

5） 同調査が明らかにした，大学生における友人関係の実態については，辻泉（2017）で詳細に検討しているので，そちらもあわせて参照してほしい。しかしながら，同論文でも触れたように，全国のさまざまな大学生を対象とした調査においても，大学の所在地や，入学難易度などと比べて，やはり友人関係の実態においては，男女による違いが最も目立っていたのが特徴的である。

6） ここで興味深いのは，かつて「三高（高身長・高収入・高学歴）」と呼ばれた要素にあたる項目について，「背が高い」は，「外見・肉体的男性性」因子に，「経済力がある」「頭がいい」は「経済・コミュニケーション力的男性性」因子へとわかれたことであろう。紙幅の都合上，詳細な紹介はできないが，分析対象を女性に限定しても，ほぼ同じような因子構造が得られるため，もはや実態としては，男性に対して「三高」をひとまとまりに求めることは薄れつつあるといえ，ステレオタイプな「男性性」が衰退に向かいつつあるのだとすれば，このことは歓迎すべきかもしれない。

一方で，「女性にやさしい」や「コミュニケーション能力がある」などが，「経済力がある」「頭がいい」と同じ因子を構成しており，あたかも近年でいえば，「ヒルズ族」と呼ばれているような「ネットベンチャー企業の経営者」や「セレブな人々」を思い起こさせる結果となっている。若年男性にとって，もしも経済力や頭の良さがなければ，他者（特に女性）との円滑な関係を保てないというイメージが持たれているのであれば，それはそれで新たな問題点が表れているようにも思われるし，今後の更なる探求が必要となろう。

7） この点で，『Gender and Social Capital』（O'Neill, Brenda, Gidengil, Elisabeth eds, 2005）のように，社会関係資本とジェンダーの関連を掘り下げていく研究も，ますます広まっていくことが期待されよう。

参考文献

Allan, Graham, 1989, *Friendship: Developing a Sociological Perspective*, Harvester Wheatsheaf（= 1993，仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社）.

相川充・藤田正美，2005，「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成」『東京学芸大学紀要第1部門教育部門』56：87-93.

浅野智彦，1999，「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界―若者たちの東京・神戸90's・展開編』恒星社厚生閣：41-57.

浅野智彦編，2006，『検証・若者の変貌―失われた10年の後に』勁草書房.

浅野智彦，2008，「若者のアイデンティティと友人関係」広田照幸編著『若者文化をどうみるか？―日本社会の具体的変動に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー：34-61.

Chambers, Deborah, 2006, New Social Ties: Contemporay Connections in a Fragmented Society, Palgrave Macmillan（= 2015，辻大介・久保田裕之・東園子・藤田智博訳『友情化する社会―断片化のなかの新たな〈つながり〉』岩波書店）.

土井隆義，2003，『〈非行少年〉の消滅―個性神話と少年犯罪』信山社.

土井隆義，2008，『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房.

藤村正之・浅野智彦・羽渕一代編，2016，『現代若者の幸福―不安感社会を生きる』恒星社厚生閣.

羽渕一代，2011，「大学生の生活と意識（1）―家族イメージと恋愛行動―」（第84回日本社会学会大会一般研究報告Ⅰ（自由報告）報告資料）.

平野孝典，2016，「寄る辺のない若年男子―若年層における孤立問題の男女比較から」伊藤公雄・山中浩司編『とまどう男たち　生き方編』大阪大学出版会：104-32.

池谷壽夫，2009，『ドイツにおける男子援助活動の研究―その歴史・理論と課題』大月書店.

石田光規，2001，「パーソナルネットワークの多様性―その構造と機能」『年報社会学論集』14：126-38.

石田光規，2011，『孤立の社会学―無縁社会の処方箋』勁草書房.

伊藤公雄，1996，『男性学入門』作品社.

伊藤裕子編，2000，『ジェンダーの発達心理学』ミネルヴァ書房.

工藤保則，2010，『中高生の社会化とネットワーク―計量社会学からのアプローチ』ミネルヴァ書房.

Marsden, Peter V., 1987, Core Discussion Networks of Americans, *American Sociological Review*, 52: 122-31.

松田美佐，2000，「若者の友人関係と携帯電話利用―関係希薄化論から選択的関係論へ」『社会情報学

研究』日本社会情報学会，4：111-122.
松井豊，1990,「友人関係の機能」斎藤耕二・菊池章夫編『ハンドブック社会化の心理学』川島書店：283-96.
松井豊，1996,「親離れから異性との親密な関係の成立まで」斎藤誠一編『人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係』培風館：19-54.
宮台真司・辻泉・岡井崇之編，2009,『男らしさの快楽―ポピュラー文化からみたその実態』勁草書房.
森岡清志編著，2002,『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会.
内閣府政策統括官（総合企画調整担当）編，2001,『日本の青少年の生活と意識―青少年の生活と意識に関する調査報告書第 2 回調査』.
内閣府政策統括官，2009,「第 8 回　世界青年意識調査」(http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html).
中西新太郎，2004,『若者たちに何が起こっているのか』花伝社.
中尾啓子，2002,「パーソナルネットワークの概要と特性―東京都居住者対象のネットワーク調査から」森岡清志編『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会：17-39.
O'Neill, Brenda, Gidengil, Elisabeth eds, 2005, *Gender and Social Capital*, Routledge.
大谷信介，1995,「〈都市的状況〉と友人ネットワーク」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房：131-73.
Putnam, Robert D., with Leonardi, Robert and Nanetti, Raffaella Y., 1993, *Making democracy work: civic traditions in modern Italy*, Princeton University Press: Princeton（＝河田潤一訳，2001,『哲学する民主主義―伝統と改革の市民的構造』NTT 出版）.
Putnam, Robert D., 2000, *Bowling alone: the collapse and revival of American community*, Simon & Schuster: New York（＝柴内康文訳，2006,『孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房）.
総務庁青少年対策本部編，1995,『青少年の意識の変化に関する基礎的研究―「青少年の連帯感などに関する調査」第 1 回～第 5 回の総括』.
総務庁青少年対策本部編，1997,『日本の青少年の生活と意識―青少年の生活と意識に関する調査報告書』.
多賀太，2016,『男子問題の時代？―錯綜するジェンダーと教育のポリティクス』学文社.
高橋勇悦監修，川崎賢一・芳賀学・小川博司編，1995,『都市青年の意識と行動―若者たちの東京・神戸 90's 分析編』恒星社厚生閣.
辻大介，1999,「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版：11-27.
辻大介，2015,「つながる」伊藤公雄・牟田和恵編『[全訂新版] ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社：189-201.
辻泉，2006,「「自由市場化」する友人関係―友人関係の総合的アプローチへ向けて」岩田考・羽渕一代・菊池裕生・苫米地伸編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル―親密さのゆくえ』恒星社厚生閣：17-29.
辻泉，2007,「ケータイの現在―アドレス帳としてのケータイ」富田英典・南田勝也・辻泉編『デジタルメディア・トレーニング―情報化時代の社会学的思考法』有斐閣：23-45.
辻泉，2008,「現代日本における若者の市民性（2）―パーソナル・ネットワークと「趣味縁」の実態」（第 81 回日本社会学会大会　一般研究報告Ⅰ（自由報告）報告資料）.
辻泉，2011,「ケータイは友人関係を広げたか」土橋臣吾・南田勝也・辻泉編『デジタルメディアの社会学』北樹出版：50-66.
辻泉，2016,「友人関係の変容―流動化社会の「理想と現実」」藤村正之・浅野智彦・羽渕一代編，『現代若者の幸福―不安感社会を生きる』恒星社厚生閣：71-96.
辻泉，2017,「大学生たちのパーソナル・ネットワークの実態―2010 年全国 26 大学調査から探る」『人間関係学研究』大妻女子大学人間関係学部，18：125-139.